

第六十九回 本居宣長顕彰短歌大会 入選 (敬称略)

秘密基地朽ちて思ひ出地に還るゲリラ豪雨に襲はれし日の

愛媛県

秋本 哲

わが育てしなすびの色のつややかに厨にころがる電灯の下

津市

河村 ツタ子

アガパンサスの花むら総立ち気丈夫の体育系女教師みまかりにけり

松阪市

佐藤 敦子

終バスは回送の暗き箱となり五月雨のなか遠ざかりゆく

津市

山本 いずみ

うら若きをみなごなれば朽ち残る貝の腕輪に翡翠の耳輪

愛知県

中野 秀秋

午睡より覚むれば雨は上がりみて此の世に白き沙羅の花咲く

津市

内田 かおり

遠き世の土師部の息吹き感じつつ船形埴輪の説明を聞く

多気郡

森本 寿郎

鳥居とは人が造ったいや神が与えたいいや自然が産んだ

名張市

相川 高宏

大根の白き五本を箱に入れ朝日歌壇の切りぬきもくれぬ

松阪市

前川 佐千代

水求め牛舎の中に響き渡る声の悲しや地震の後の

鈴鹿市

加藤 正子

砂浜に見上ぐる二見の空の晴れ鳶の飛びゐる御塩殿の上

松阪市 村松 とし子

目の見えぬ人にとっては欄干のない橋という駅のホームは

滋賀県 船岡 房公

お下がりのサムライ・ブルーのランドセルはずませ末っ子入学式へ

多気郡 高山 幸子

ざらついた樹皮にもたれて梅の実を数えていけば双鳥とまる

三重郡 梅の古木

義理欠きし人と偶さか前後ろ土日ダイヤのバスはまだ来ぬ

度会郡 北村 保

影深き連子格子の屋並へと真夏の光が静かにそそぐ

伊勢市 西世古 悌治

牛まつり一頭三千万円競り場沸く 終れば松阪いききに師走

松阪市 村田 満彦

目の前で切りしスイカもこどもらによく見えてゐる大と小あり

津市 若林 卓宣

あやかりて父はわが名をつけたらし見せたかったな五千円札

愛知県 川合 梅子

この年の燕見ぬまま秋たちて無人駅舎は風に音する

鳥羽市 今井 順子

いくばくかの秋をふくめる法師蟬小さき地蔵の松の木に鳴く

志摩市 田畑 真弓

沖縄の義母は語りぬ「捕虜となり米軍テントで出産した」と

四日市市 安里 檀

こおろぎの後追い走るひよこらと土を寄せいる里芋畑

松阪市 邦子

「チョウサヤ」と遠のくみにこしに担がせて君の病の去るよう祈る

松阪市 すづり

からすうりの蕾のほどけある夜八時地は冷めやらず重陽の節句

津市 谷本 うた子

亡き祖父が湯船を太平洋として語った第二次世界大戦

大阪府 秋吉 和紀

最北の木造無人駅を抜け五百歩あるくと利尻富士見ゆ

北海道 藤林 正則

(小学生) ねころんで背中に地面の温かさヘルセウスぎの流れ星待つ

松阪市立花岡小学校 れい

(中学生) 画面ごしそこからきこえる一人の声世界に色がついた気がした

松阪市立中部中学校 堀畑 莉瑚

(高校生) 土壁に落書きの跡亡き祖母と幼き私まだそこにいる

高田高等学校 永梨